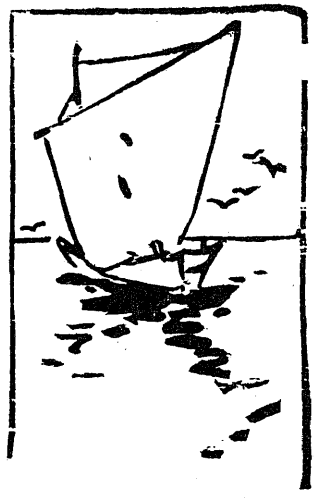
婦人と子ども



實驗上の育兒法（承前）

醫學博士　瀨川昌耆口述

▲熱浴とレウマチス　日本人は西洋人と比較して從來一般に熱い溫度の湯に浴る事が習慣で、此習慣を俄に改める事は迚も實行の出來ない斗りか日本人の爲めには熱浴を取る方が却つて衞生上利益を認める點が多いのです日本の家屋は前にも云ふ通り構造が實に不完全で、濕氣を含んだ空氣や寒氣の强い時などは西洋の建築のやうに充分之れを防遏する事が出來ない、又衣服も其通り肌を現はし易く、洋服の如く手の先きから足の先きまで規則正しく纏ふて置く事が出來ない、夫れ故やゝもすると季節の如何に

拘はらず寒冷に冒される、日本人がレウマチスと云ふ病氣に罹るものが多いのも、畢竟家屋や衣服の不完全なる關係からであらう、併し家屋の建築法や衣服の作り方が斯く不完全なるにも係はらず、日本人には猛烈なるレウマチスが割合に少ないのは全く熱浴の賚と信ずる、濕つぽい空氣や冷たい寒い空氣に肌を曝露しても熱い湯で充分に身体を温めるからレウマチスの發病も豫防する事が出來るし、もしまた發病しても大抵の病症は熱浴のために自然に癒えて仕舞ふのである、之れを西洋人の如く温浴を取る事にして攝氏三十五六度の湯に浴つて居たら、日本人はなほ一層強きレウマチス症に侵され之れが日本人種の痼疾となる不幸を招いたかも知れぬ、幸に熱浴の習慣で之れを防遏し得たのは最大なる幸福と云はなければならぬ、夫れにレウマチスの治療法として熱浴療法を勸める事があるが、從來熱浴の習慣とレウマチスとの關係は全く此の療法と一致した説である

▲無害有効の熱浴　熱浴はレウマチスには有効であるが、然らば一般の衞生上には害があるかと云ふに、之れは大分世間で矢釜しい議論があつて、理屈の上からは害があると云はれて居る、去れど衞生上の事は一片の理屈をもつて全般を窮ふことは出來ぬ、理屈の上からは惡い事だ害になる事だと云つても實際之れ丈の弊害が現はれて、理屈の論據を確かめると云ふ事でなければ其の理屈は空論と認めなければならぬ、夫れと同じ事で日本人は西洋人の如く攝氏三十五六度の温浴を取らずに四十度を越へた熱浴を取るのは衞生上害があると唱へた處で、未だ是々の害が的面に顯はれたと云ふ事も無く、子供の時か

ら熱い湯へ浴つて居ても何れ丈の害があつたと云ふ事實も認めない、殊に昔から日本人の習慣となつて居た事であればヨシ理屈上では熱浴は害があるとした處で、實地の上には夫れ程の害は顯はれないものです、況して事實上から無害を證明されて居る事なれば私は日本人の爲めに熱浴を無害有効と信ずるのである、去り乍ら一言申添えて置きますのは以上のお咄は健康の人に對して云ふので、或る場合即ち心臟病、肺病のある者、逆上し易き人など平生健康ならざる人々には四十度以上の熱浴は堅くお禁め申します、入浴中卒中症を起したり肺病患者が喀血したりする事はよくある事です尙夫れと長湯をする事は宜しくないので、御婦人方の長湯は一層御注意を願ひたい

▲産湯の始末　お咄しが枝葉に渡つたが、本論へ戻つて産湯の事をも少しお咄し致さう、産湯の行はせ方は産婆の役目であるが、舊産婆抔は隨分無鐵砲な行はせ方をするから特に御注意申して置くのです、産兒の体を洗つた湯で直ぐに顔や眼を洗つたりすることのないやうに顔や眼は必らず別の器へ新たに湯を盛り夫れで洗ふやうになさい、又淋毒ある母なら藥液點眼の外に嚴重に産兒の眼を注意しなければならぬ、ソコで良質なる石鹸で身体を洗ひ清め全く湯を行はせ終つたなら、軟き手拭か又は軟き西洋手拭にて必ず手早に拭いて産衣を着せ、豫め用意せし蒲團の上へ安らかに寢せるのである

▲生兒の入浴　生後凡一ヶ月間は毎日一回宛湯をつかはせ、石鹸で身体を洗ひ清めねばならぬ、殊に頭部、腋の下、股間等に注意して垢のつかぬ樣に洗ふがよい頭皮からは脂肪の分泌が盛な爲に稍もす

ると脂肪が堅く附着して痂皮となり、其上へ塵埃が付いて次第に不潔になる斗りだから、毎日丁寧に能く洗い落すやうに仕なければならぬ、夫れから腋の下や頸の下、股間、又肛門のあたりも垢や皮膚の分泌物が着いて夫れが分解される爲め此の部分は糜爛て小兒は非常に煩悩つて困るものだから丁寧に洗つて遣るが宜い、殊に股や臀の邊は大小便の汚れから日に幾度となく濕布を取りかへる其度毎に其の部分を手拭を湯に浸して拭ひ、其のあとをば乾いた手拭で靜に拭ひ若したゞれたなら拭いたあとへ亞鉛花澱粉か普通の白粉を撒布と糜爛は次第に癒つて仕舞ひます

▲襦袢は裏返しにせよ　生兒に產湯を浴はせて仕舞つたら、裸体では置けないから取敢ず着物を着せなければならぬ、此の着物が即ち御承知の通り產衣であるが、之れは何ういふ品質を選んで何ういふ鹽梅に裁縫したのが適當であらうか、又是れ迄の習慣上如何なる弊害を矯正せねばならぬか私の實驗をお咄し致さう、先づ下には襦袢を一枚着せなければならぬが、總て肌へ直接に着く布の品質は毛布よりも絹布よりも一番綿布が適當で、詰り晒木綿類の成可く軟かい一旦水に入て糊を落したのを貴びます、ソコで縫方は筒袖にするので袖丈と袖付けを各々三寸五分位にするのです、出來上つたなら其の襦袢を裏返しに仕て着せる事を忘れてはなりません、斯うすると縫目の襞が生兒の軟かい皮膚へ當るやうなこともなく、磨れたり爛れたりする心配もないのです、私は自分の小兒には孰れも裏返しの襦袢を着せ、肌着のために生兒の皮膚に故障を起した事など一度もありませんでしたから是れは是非お勸め致すので

あります

▲産衣の改良　襦袢の上へは一ッ身を着せるのが通例である、是れも縫方を改良して袖丈と袖つけを各〳〵四寸にするのです斯うすると生兒の手を楽に袖へ通すことの出來る斗りでなく、附紐を締める時に丁度袖の下へ締めるやうになつて別に八口を明ける必要もない、爾うして襦袢と重ねても襦袢の袖の前に申す通り三寸五分位ですから一ッ身とは楽に重なります、袖丈や袖つけが定つたらソコで綿を入れて綿入の一つ身に拵へるのです、綿の入れ方は青梅綿を胴の處へは三枚、腰と袖へは二枚位に致すのが先づ適當である、デ夏の熱い時候に産れた生兒には此綿入を一枚と襦袢一枚で宜しいが冬の寒い時分には此綿入れを三枚お着せなさい、尤も衣服は氣候との關係であるから斯うお咄し仕たからと云つて何處の土地でも必ず之れ丈け着せよと云ふのではない、其土地の氣候によつて臨機の處置をするのが必要であるが、右は東京の氣候で實驗した程度をお咄しするのであるから其お積りに御承知を願ひたい

▲産衣の色と附紐　産衣の色の事を序に申して置かう、從來茜木綿とか、鬱金木綿を用ゐるのが一般の例になつて居るけれど稍もすると斯ういふ色が皮膚へ染つて非常に不潔になるものである、是れは甚だ宜しくないから凡て襦袢は白の色にするし、又一ッ身も裏を付ける時、裏丈は必ず白を選ばなければならぬ、尚附紐の附け方は申す迄もなく後ろ紐にして前へ廻して緩やかに締めるやうになさい